

この前の戦争の時のことです。日本の兵隊が中国で戦っていました。

あるとき、戦闘機が三機、飛行場にもどってきて格納場所かくのうに入ろうとしました。ところが、二機は決まった場所にすうっと入ったのですが、一機だけは違った方向へ行つて止まり、動かなくなりました。早く飛行機を隠さないと、空を飛んでいるアメリカ軍の飛行機に見つかったらたいへんです。そこで、整備兵が十五人ほど出て、「わっしょい、わっしょい」と、飛行機を木の陰に押し寄せていきました。

ところが、あわてていたので、だれも高圧線こうあつせんがあることに気づきませんでした。それで、飛行機のアンテナがバツと高圧線に引っかかってしまったのです。とたんにブワツともののすごい音がして、飛行機もろとも整備兵たちはみんな吹っ飛んでしまいました。

しばらくして、兵隊たちが助けにかけつけましたが、みな死んでいました。そのとき、だれかが、

「こいつ、生きてるぞ。動いたぞ」とさげびました。ひとりだけ生きていたのです。

十五人のうちひとりだけ助かって、あとはみな戦死です。助かった人が、こう話していました。

「バーンと飛ばされたとき、あたりが真っ赤になったんだ。しばらくしたら、光がシューツと上がって、その中から弘法大師さまが現れたんだよ。たしかにおれは、弘法大師さまをおが押んだと思う。そのとき、『こいつ、生きてるぞ』という声こゑがして目が覚めたんだ」

村上郁 再話

資料 『子どもと家庭のための奈良の民話』 村上郁再話／京阪奈情報教育出版